

身近にあつて容易でないことへの提案

岡 田 正 章

幼児教育についての関心が次第に広まっていることは喜ばしい。従来、教育といえば、学齢以上の児童についてのものが考えられ、幼児についてのものは、一部の恵まれた家庭の幼児に限って考えられる傾向があつた。

幼児教育論の対象となる幼児が、広がったことも喜ばしい。第二に、従来の幼児教育論は、どちらかといえば一つの家庭内で、母親が自分の子どもを育てる場合の心構え論が中心となつていた。これに対して、今日の幼児教育論の一つの主な特徴として、子どもを幼少の時期から集団で育てることの意義が重視されてきていることをあげることができる。

集団教育ということばと連なつて、集団保育・集団育児というこ

とばが普及されようとしてきている。保育所・幼稚園が脚光をあびて、注目を受けているのも、こうした幼児教育論の台頭によるとも思われる。

これら二点に関して、今後の幼児教育界は、理論と実践の両面から、より一層確かなものを把握することに大きな課題があると思う。

まず第一に、後者すなわち集団保育について、大いに百家鳴争を期待したい。子どもが集められて、大人が怪我をしないよう監視している形が集団保育でないことはいうまでもない。そこには、秩序・組織が必要とされる。このためには、子どもの年齢・発達段階に即して、集団の構造・集団影響ないし集団行為の個人差などが、さ

らにくく明にされなければならない。乳児・幼児は、自分が受けている状況の適・不適を表現することはほとんど不可能である。これではかろうという大まかな想定に立って、従来と異なる処遇をすることには、きわめて大きな慎重さが必要である。

集団保育即ちいつでも・どこでも・誰かといっしょに行動しなければならぬ子どもをめざす保育というイメージがありすぎはしないだろうか。集団的な活動とともに個人的な活動を重視する保育——一人遊びに固有の役割を認め、指導の中に正當に位置づけていく保育——集団ということばの意味するものを、誤まった一辺倒にしないための努力が必要ではあるまいか。

保育専門家が、幼児期に、社会性の芽生えを育むことの重要性を指摘することに異論はない。より一層の努力が必要であろう。しかし、このことが家庭での育児の役割を軽視させるか、もしくは無視させるような結果をもたらしてはならない。

極めて限られた家庭の母親であることに確信をもちながら、しかし、乳児をもつ一母親の口から次のようなことばを直接耳にしたときは、たとえようのないショックであった。

「生まれてすぐ赤ちゃんは、ただ、乳さえ飲ませ、清潔にしてきえおけばよい。もそもそ動くだけで人間の子というよりも、動物の子どもと同じだ。衛生知識のない母親よりも、専門教育を受けた保

育者にまかせる方が安全であり、望ましい。」

そのひとは、自分のこうした意見の裏づけとして、イスラエルのキブツにおける乳児の家・幼児の家・幼稚園が専門家によって二四時間保育を行ない、その結果がきわめて望ましいものとなっていることに言及する。

しかし、こうしたキブツにおける協同育児・保育の描写は必ずしもすべてが真実になっていない。たとえば、実地に生活し、社会的分析をもととしてまとめられた山根常男氏（大阪市立大学教授）の「キブツ」（誠信書房）には、乳児の家について、次のような叙述がある。

「原則として母親は産後、六週間はキブツの仕事から解放される。このあいだ、母親は通常四時間おきに一日に六回授乳する。六週間たつと母親は徐々に正規の仕事に復帰する。しかし、仕事に復帰するといつても、乳児の世話をする限りは、大体において半日労働である。母親は母乳がでないときでも、メタベレット（保姆）の準備する人工栄養をみずから乳児にあたえる。原則として母親は自分で子どもに着物をきせたり、入浴させたりする。……母親はいつでも欲するとき、乳児の家を訪れて子どもの世話をするこができる。」

このような母子結合の原則は、厳格で杓子定規的な母子分離的取

り扱いを暫くつづけた後の、実践的反省において重視されてきている。

子どもを育てることから離されて、「フラストレイトされた母性的感情は……キブツからのメムバー離脱のもつとも重要な原因の一つでもあった」と結論されている。

このような引用的指摘をとおして、私は、母子のいわゆるベッタリ主義を強調しようとするのではない。

社会・経済事情の動きいく中で、その側面に適応することの不可避的な事態があるとしても、その適応に性急の余り、他の側面、とくに家庭内での親子関係に固有かつ重要な役割に眼を閉じることに括然とする風習を生みだすことに警告を發したい。

経済的基盤を無視しては、育児も保育も存立し得ないことはいうまでもない。しかし、経済法則は強力であっても、不変・固定的なものではない。育児・保育の法則が明確に打ちだされることによつて、I・L・Oが総会において報告しているように、子どもをもつ母親が、労働に従事するか、家庭にあつて育児に従事するかを全く自由に選択できるような社会機構が創造されるにあたって、現実の理論的根拠を用意するところに、保育学研究者の一つの研究課題があるように思う。

次に、以上のような保育理論究明の基本的姿勢において、広く国民が、もつともつと幼稚園・保育所をたいせつにする世論の担い手となるよう期待したい。幼稚園・保育所は建物があつて、子どもが集まっているということだけで十分なのではない。何よりも第一に、よき保育者がいなくてはならない。保育の仕事に生きがいを見出す男子・女子が多すぎて困るといふ時期の到来が待ち遠しい。このためにも、保育者の労を正當に評価し、これを社会的に正しく即高く位置づけるための努力が必要である。

保育の施設・設備の条件整備も重要である。幼児の遊び・活動はこれらを誘発する遊具などを媒介とする。無から活動は生じない。大人のボウリング場に、あきれられるほどの資金が投ぜられているにもかかわらず、園舎・保育用具が旧態依然とした姿にとどまっていることが、何よりも遺憾である。レクリエーションのための施設を無用とはしないが、しかし、余りにも大人のすぎること国民総反省運動が望まれる。

保育所・幼稚園の役割が強調されればされるほど、内容豊かな園でなくてはかえつて、幼児をスポイルしてしまうということにもなりかねない。理想を遠大にもちながら、一つでも・少しでも保育の場が子どもの楽園となりうるよう、万人を納得させるために一層の努力を払いたい。